

「武装」から「自然体」へ—— いま時代を物語る、バッグの選び方

バッグのトレンドが刷新された背景には、女性たちのマインドの変化が大きく関係しているようです。そんなムードを捕まえて、自由なバッグを手に入れたら、その効果を存分に楽しむ海外セレブの姿をキャッチ。

文 中野香織 (服飾史家)

2018年は時代が大きく動いた年だった。

「多様性と包摂」のある社会を作ろうという動きがひととき活発だった。その運動の一つの集大成が、2019年1月3日のアメリカで開会された第116議会の光景……にな

ったのではないかと思う。史上初のムスリムの女性議員、史上初のネイティブアメリカンの女性議員、史上最年少の女性議員……と「史上初」

尽くしだったのだ。「史上初」の女性議員たちは、それぞれの出自やアイデンティティに根ざした、色も形もさまざまな装いに身を包み、満面の笑顔で初登院した。高い地位に「準じる」という暗黙のドレスコードに従った服を着ることが多かった。

しかし、カラフルな服装に身を包んで威厳と品格で輝く新議員たちは、もはや「男性に準じる」必要などまったくない時代になったのだということを示してくれた。

そして2018年、多くのブランドが毛皮や希少動物の皮革を使わないという宣言をおこなった。その流れの延長に、2019年2月には、

ロサンゼルスで史上初のヴィーガン・ファッション・ウィークが開催された。「動物にやさしいことは、新しいラグジュアリー」という雰囲気は、今後、ますます濃厚になっていくだろう。

もちろん、毛皮は人間の歴史ともにもある自然素材でもある。製法や扱い方によっては環境にやさしく持続可能な素材なので、動物由来の素材を全否定する方向に偏るのは危険である。ただ、是非を超えた時代感覚というものがあふれている。できれば植物由来の素材を使ったアイテムで時代の空気と

同調したいという願望は、ミレニアルズを中心に確実に芽生えている。こうした社会のムードを反映し、いち早く変化を遂げているのは、バッグである。

この春夏シーズンの大きな特色は2点ある。まず、ラファイアやストロリーなどの植物素材を使ったバッグが続々登場していること。カジュアルなかごバッグばかりではない。クラシックな形でフォーマルな印象を与える植物素材のバッグが多々、提案

されている。植物素材と上質なレザーを組み合わせたバッグも多く登場

しており、メーガン妃もいちちやくトレンドに乗り、植物素材とレザーのコンビの軽やかなバッグを携えている。

特色の二つ目は、カラーパリエーションが豊富に展開されていること。肌なじみのよいトーンダウンしたピンクやグリーン、ブルーやイエロー。堅い皮革の黒いバッグで「男性に準じる」武装をする必要などなくなった今、自分の感性になじむ明るい色彩を、肩の力を抜いて自由に選べばよいのである。実は私もくすんだピンクのバッグを愛用している

が、意外とビジネスの場で浮かず、ちよつとした社交シーンにもとけこむので、むしろ機能性とファッション性が同居する実用的な色だと思っ

ている。洋服がますますカジュアルになり、何でもありになった現代だからこそ、時代に対する感覚を端的に表現できる要素がバッグになった。品格とファビュラスな印象が同居する

自然体の女性はいつだって理想だが、今シーズンはまさにそんな女性に似つかわしいバッグが目白押しなのである。

1 第116議会の光景

トランプ大統領率いる共和党を抑え、民主党が下院を掌握した2019年アメリカおじれ議会。女性議員が初めて100人を超えるなど、多様な顔ぶれが話題に「出自を問われる自由な装いも印象的。



2 ヴィーガン・ファッション・ウィーク

ファッション業界における動物からの搾取に終止符を打つことを目的に開催された企業参加のファッションショーやインスタレーションが行われた。ファッションというものに倫理感をもつて対峙した。新時代を思わせる催し。

3 ミレニアルズ

一般的には1980年ごろから2000年代初期に生まれた世代を指す。生まれたころからネットに慣れ親しんだ最初の世代。シェアや共有を重視する。独自の消費行動やカルチャーは何かと話題に。

4 メーガン妃

今春出陣する英国のメーガン妃。感度の高いファッションに世界中が注目している。写真は昨年夏のポロ競技大会の観戦中のひとコマ。ネイビーのワンピースに、ラファイア素材のクラッチを合わせて。

